№６４
令和６年１２月１日
発行　多治見市教育研究所

URL: http://school.city.tajimi.lg.jp/kyoiku/
本誌は、多治見市教育研究所ホームページ上でもご覧いただけます。

巻頭言 34 年前にいただいた一冊の本を読み返して

精華小学校　校長　林　伸彦

10月22日に東教推並びに多治見市教育委員会指定の研究発表会を開催しましたところ、400名にも及ぶ先生方にご参会いただき、誠にありがとうございました。お礼の言葉の中で、子どもの多様性を生かす私たちの対応力の大切さにふれさせていただきました。そのことにかかわって、先日、34年ぶりに手に取った本の一節を紹介させていただきます。その本は、平成元年度で養正小学校をご退職なさった柘植厚一校長先生の養正小在職中の校長だより「朝影」がまとめられたものです。 長い引用となりますが、お付き合いください。

（前略） 今後、確実に一人一人に応じた教育ができるような制度の改革・施設の改善、学級定員や教員定数の改善が行われれば、一斉指導は減っていくでしょうが、現在では一斉指導が中心になっているのは、やむを得ないことであり、そのよさもあります。（中略） 一斉指導のよさというのは、大勢の子どもたちから多様な考えが出され、一人一人の子どもが自分の気づかない見方や考え方にふれながら、自分自分の理解を深めていくところにあります。

先日の算数の全校研授業でも、子どもたちが表を見て見つけたことは様々でした。一斉指導の中でも、個性は自ら出てくるものです。それを出しやすくしてやり、それを生かしてやるように努めるのが、私たちの仕事ではないかと思うのです。あの算数の時間、子どもたちがそれぞれに何かを見つけ、その中で本時最も重要なきまりを学んでいったのは、個性を大切にした一斉指導であったからと考えます。

一人一人に足場をもたせる（当時の研究主題は、足場と追求過程のある授業の工夫）というのは、言い換えれば、個性を出すことができるようにしてやるということでしょう。

ところで、授業をやっていると、まったく教師の予想しないような考え方や発言に出会うことがあります。

社会科の授業です。江戸時代の身分制度を学ぶ資料として、先生が「上見て暮らすな、下見て暮らせ」と書いた紙を示し、「これは誰が誰に向かって言った言葉だと思う？」と聞かれました。大部分の子どもが「上の人が下の方の人に不満をもたないように言った言葉です。」と答えました。ところが、一人の男の子が「ぼくは違うと思う。下の人が上の人に対して、下の者の苦しみもよく見て暮らしてほしいと、お願いした言葉だと思います。」と言ったのです。（中略） こうした例は、私たちの日常の授業の中にもたくさん見られますが、これを生かすか殺すかが、一斉指導の中で個性を生かせるかどうかの決め手の一つとなると考えます。
（昭和63年11月5日号より一部要約して引用）

「生かすか殺すか」と言われるとやや物騒ですが、まさにこれが対応力だと思います。また、「足場をもたせる」ことについて、次の号で柘植校長先生は、「やること（課題）」、「やり方（見通し）」がわかって、「やる気になる（できそうだ、やってみたい）」ことだと言ってみえます。これは、現在も重視されている、導入での教師の大切な役割です。さらに昭和61年5月17日の号では、子どもに力をつけるためには、「一人で頑張る時と場」と、「みんなでやりぬく時と場」の設定が必要だと言ってみえます。これには、「主体的・対話的で深い学び」をめざすための「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」に通じるものを感じます。

こうして見てみると、40年近く前の学校、並びに諸先輩方がめざしてみえたものと現在、我々がめざそうとしているものは、大きく変わっていないと感じます。「今後、確実に改革・改善が行われれば…」と言われた柘植校長先生には、「まだなのか？！」と言われそうですが、大切にすべきことは昔から変わらない、これをまさに「不易」のものとして、新たに手にしたICTという便利な道具も活用しながら、個性を生かした子ども主体の授業づくりに今こそ挑戦です。